

「がん」と「心のケア」

副院長 大澤 浩一郎



「病は気から」という言葉があります。聞き慣れた言葉ですが、今改めてその大切さを認識すべき時ではないでしょうか？それは最近のがんの告知と告知後の患者さんの苦しみや支えるべきご家族のつらさの問題が、我々医療サイドにも大きな影響を及ぼしているからにほかなりません。

近年がんの治療は劇的な変革を遂げつつあります。新しい抗がん剤や分子標的薬という比較的副作用が少なく且つ効果の高い薬剤が次々と開発され、たとえば外科領域では、手術のみで治療が完結するがんはほとんどなくなりました。当然それだけ治るがんが増えてきたことは間違いありませんが、それでも治療には副作用や慎重な体の管理が必要で、これを患者さんのみならずご家族にもしっかり理解していただいたうえで乗り越えることが、がんを克服するために欠かせないポイントです。そのため現在がんの治療にはほぼ100%の告知が一般的となっています。

ところががんの告知を受けた患者さんの精神的衝撃は想像を絶するものがあります。そしてそれが新たな病を併発する危険を秘め、強いては最も大切な本来のがんの治療の妨げになることが少なからずあるのです。

がんの告知を受けた患者さんの反応には一定のパターンがあります。

第一段階	衝撃段階	約2～3日(目安)
第二段階	不安定段階	約1～2週間(目安)
第三段階	適応段階	約2週間以降(目安)

具体的には、告知を受け「まさか」「やっぱり」と思う段階、この時期多くの患者さんは後から

振り返ると「頭が真っ白で何も考えられなくなっていった」と述べています(衝撃段階)。その後心の動揺が約1～2週間続きます。楽観的になったり悲観的になったりします。「なぜ私だけ?」「あのとき検診さえ受けていれば…」などや、時に主治医や家族に対して攻撃的になることもあります(不安定段階)。この時期を経て、一般には次第にがんに対して正面に向かい合い取り組み始める時期を迎えます(適応段階)。

大切なことは、この第二段階から第三段階への移行がスムーズにいかない場合を「**適応障害**」と言って、これは立派な病気だということです。

たとえば乳がんの患者さんの30～40%は精神疾患を合併していると言われ、その大半は「**うつ病**」と「**適応障害**」なのです。最も大切なことは、この状態を放置すればその後のがんの治療の大きな妨げになるという点と、これらは治療が可能な病気だという点です。

治療の基本は、精神療法的アプローチすなわち「**心のケア**」です。励まし、情報の収集などの**環境療法**、誤った認識を正す**認知療法**、たとえば「日本人はがん＝死のイメージが強いが、実際は日本人の二人に一人は一生のうち二度はがんにかかるものの、がんで死ぬのは全体の30%に過ぎない」また「乳がんの治療はすべて抗がん剤を使うわけではなく、ホルモン療法や手術だけでよい乳がんも近年増えている」など正しい知識を伝え納得していただく治療です。それに加え専門家による適切な**薬物療法**を行うことでさらなる治療効果が期待できます。

がんの治療はこのようにがんだけに対する治療のみでなく、患者さんの心のケアを行うことが非常に大切で、これらは決して医者のみでできるのではなく、患者さん、ご家族と、医者、看護師、薬剤師、

ケースワーカーなどすべてが関わってチーム医療を行うことで達成できるものと考えます。またご家族は、第二の患者といわれ、ある意味患者さん以上につらい立場に置かれることさえあります。ですからがんの告知をする場合、患者さんのみでなくご家族の心のケアも決しておろそかにできない問題です。

このことを踏まえると、治療に際し特に重要な立場にいるのが看護師ではないかと思われれます。医者と患者の橋渡しのみでなく、精神療法では自らが中心的な役割を果たす必要があるからです。

当院では本年県内三人目の「乳がん認定看護師」が誕生しました。今この職員を中心により良い乳がん治療を目指して新たな試みを模索中です。これからはさらに病院環境の充実を図るとともにヒトの育成にも力を入れ、患者さんや、ご家族に貢献できればと考えています。

もちろん病気はがんだけではなく、他の疾患でもほぼ同様のことが言えます。医療において大事なことは、お互い信頼し合い励まし合いチームで進むことなのです。

どうぞお気軽に病気の悩みをスタッフにお話してください。そのことが医療の進歩にもつながると信じてやみません。

本年12月1日より、
「病院敷地内全面禁煙」
 となります。
 皆様のご理解、ご協力をお願いします。

芙蓉協会の歴史 『緑町病院(旧)(1957～1969)』

経営危機となった芙蓉病院。田子政子理事長の出した結論は、同じ思想を持つ、経験豊かな組織である日本基督教教団の力にすがり、経営委譲する事だった。負債を清算することを条件に全面支援の約束を取り付けた。

断腸の思いでW. H. ダンフォースの子息であるD. ダンフォース氏に支援を請い、700万円の寄附を得て、閉院の危機は解消された。田村久彌院長が着任され、『財団法人芙蓉協会ダンフォース記念 緑町病院』と改称した。

5年後、田村院長はインドネシアへ医療奉仕のため旅立ち、千葉医科大学(現・千葉大学)より豊浦公世院長が着任、安定経営を目指し診療を行った。

(次回は、『緑町病院(新)』を掲載いたします。)

文責：法人本部事務局 事業企画室 笠原典彦

